長崎大学教育学部教育科学研究報告　第46号　1～9（1994）

教育的監視装置としての遠近法

原　野　利　彦

Perspective as System of Educational watch

Toshihiko Harano

我々は個々の子どもの身体の奥底から湧き起こってくる感性を尊重しつつ教育をすると言う。しかしその舌の根も乾かぬうちに特定の理念らしきものを教育目的やねらいの名において子どもの身体に刷り込むことをもって教育活動とすることに何の疑念も抱いていない。その時教師の眼差しは監視人のそれであり，教室は監視装置として働く。今，この視線とそれを守る装置が問い直されている。本稿のねらいもそこにある。

第１章　崩壊期そのものを方法化

確かに近代的遠近法すなわち直線的思考や技術は鋭い批判力をもたらした。また意味を共有する期待の地平を地球規模にまで拡大することもできた。しかし今日ではこれは直線的一貫性を維持するために捨象するはずの諸断片の反乱を制御し得なくなっている。つまり諸々の主要概念が文化的コンセンサスを得ることが困難になってきたのである。そのため〈真／偽〉，〈善／悪〉，〈美／醜〉の境界は曖昧になり始め，基準に沿う行為は脆弱な偽善に成り下がり嘲笑の対象となる。だから既存の価値への軽蔑も，それが風俗化した取るに足りない否定のポーズなのか，それともまともな文化批判であるのか見極めがつけにくくなっている。このような直線的整序による普遍化のエネルギーの弱まりによって，世界はまた諸断片に戻り雑然とした様相を呈している。近代の終焉としての変転期とはこの直線化するエネルギーが弱まる時期のことである。それはベーコンがかつて言ったような自然を拷問にかけ，真理を白状させる力を失い，世界はそれに勝る複雑さをもって拷問者に報復し始める。科学技術が環境破壊の元凶とされ報復の対象となり始める。これは一元的な社会の計画と管理が市場原理に基づく社会を批判し克服し得るという還元主義への報復である。それは電子的な微粒子レベルの技術とは比較にならない程の粗大なレベルでの物理的変形を主とする生産＝拷問・強要にモデルをとる思惟形態の力の弱化である。人間は目的として扱われなければならないという思想も，個人を纏まりのある単体として扱うことに何の疑念を持たなかった近代の産物にすぎなかった。

人間による自己管理能力に信をおいた計画的社会の崩壊を考慮するとき，近代の大量生産方式に基礎を置いた思考の習慣が終焉に近づき，電子テクノロジーにもとづく消費の動向によって決定される生産―消費の時代にふさわしい秩序形成の方法が必要となる。つまり〈一元性・生産・絶対性〉から〈多元性・消費・相対性〉への移行，または機械的機能主義とデザイン，電子テクノロジーへの移行にふさわしい方法の探求である。つまり様々な概念やイメージを自明のコンセンサスを示すものとして扱わないために，近代の「表象

のイデオロギー」を批判的に検討することが必要なのである。

1．線条的拘束力からリズム的拘束力へ

この〈操作＝対象化・自然に対する拷問的支配〉から〈消費＝交換＝コミュニケーション的支配〉の移行期のイメージや言語的行為は，文化的規則などのルールに背くまでになり，概念とメッセージを無視するに至ることが多い。またその際に修復不能な統辞上の省略を伴ったりする。こうして大量消費社会における大衆の動員法としては，線条的遠近法は機能不全となる。視覚優位を異常に発達させた線条的遠近法の理性は自己や世界から厚みを取り去り平板なものにしてしまっていた。ベンヤミンも言っていたように理性は宗教のもつ統合力をもたないことをますます露呈する。人々はあらそって疑似宗教に向かって走り出す。共感を呼ぶ力をもたない視線に限定された理性的な遠近法に替わって，非理性的な疑似的な遠近法が探求される。それは旧来の遠近感を無効にし，新たな「実現／非実現」（ハイパーリアリズム）や「仮想実現」（ヴァーチュアル・リアリティ）をつくりだす方法である。地球全体がリアルタイムで結ばれる今，時間概念よりも意志や行為の前提となる遠近感という空間概念が緊急な関心事になっている。それの目指すものは大衆の欲望と感覚を動員し，それを再編成する力をつきとめそれを組織する方法である。それは視覚や触覚に訴える具体的な物質的な操作としての方法ではなく，或るエネルギーとして，もしくはリズムとしての方法である。事実，我々の生活は商品を取り巻くイメージソングや，商店街の「音楽的」騒音，オフィスや家事や勉強のＢＧＭなどの騒音のパニックによって組織されている。我々はこれらのリズムによって想像力を飼い慣らされ，権力の想像力の一部として取り込まれようとしている。我々は一時的な紛い物の一貫性を提供され，次ぎにこれを「自発的に」乗り越えるために次なる一貫性を提供されるという回路に閉じ込められ，これを繰り返すというリズムによって支配されている。それは今までの文字文化（視覚優位の文化）によって排除していた消費社会の大衆娯楽的要素を飼い慣らして，システムに積極的に取り込む方法である。しかし，ここで我々が設定しなければならない問題は生産主義的遠近法が力を失った時代の**〈雑然とした多様性〉を〈秩序づけられた多様性〉**へと変えていく方法とは如何なるものかということである。換言すれば**〈崩壊期そのものを方法化〉**するとはどういうことなのかを問うことである。

そのためには単一であろうと複数であろうと一貫性を装うものを内破する力学を検討の対象にしなければならない。つまり，意味と主体の危機や克服（異議申し立て）を通して垣間見られる意味生成の過程を分析しなければならない。これは断層のない線条的遠近法に亀裂やズレを見いだすことである。遠近法的な視線による把握の過程は，直線的であり，即時に対象に到達し対象を構成できるものと考えられている。しかし我々はこの方法意識に亀裂を持ち込み，過程とは折れ曲がり，断片化しているのであって，たとえそれが連続するもののように見えていても不細工な継ぎ接ぎにすぎないことを暴かねばならない。視線という不可分の直線を開いて，断片の複合的な構成物にすることだけではない。視覚だけではない過程（聴覚，触覚，臭覚，味覚，及びこれらの感覚の連合）において自覚の過程を探ることである。

この遠近法による意味作用に亀裂を与えるものとして，今日の世界はまさに技術だらけの風景を通して音響や映像のパニック的氾濫に見舞われている。近代的な意味作用とは異質のもの，意味作用よりも過剰なものに着目するために，例えば生後９～10カ月ぐらいの幼児の反響言語や精神病者の舌語りなどに赴く必要はない。また一般に受け入れられている意味作用やそれを支えている統辞構造そのものを破壊するような効果をもたらすものを探して詩的言語に赴く必要もない。諸メディアの「素敵な振動」に身を委ねている若者を見れば良い。そのメディアに揺さぶられてすっかり五感を外化した彼らは一種のメディア的リズムに浸透しかつ浸透されてハイパーリアルな亡霊の如きものとして振動している。自我は振動し続ける素粒子として再生産されている。その振動は確かに分節やルールのようなものを含んではいるが，伝達的な意味作用を越えている。それらは名付けようもなく本当らしくもない。この記号以前の諸作用を特徴づけているものはリズムやイントネーションであり，欲望を持つ身体に依存しているように見えるが，その身体の欲望すら越権の記号としての主権を失い漂流するシミュラクルとなっている。そのリズムは意味作用をはみ出し，文法的規則に背き，しばしばメッセージを無視する。それはしょっちゅう統辞上の省略を行い，リズムを持つ場を支えるカテゴリーらしきものを復活不可能にする。意味と非意味との間の激しい揺れ動き，言語とリズムとの間の不透明な揺れ動きに見られる或る種の形式性は産業的な直線的遠近法を過去のものにしてしまうのである。一義的で合理的な科学的言辞は極力この過剰を隠そうとするが，とても隠し覆せるものではない。学校における子供たちは学校的リズムに背を向ける。我々はこの揺れ動きのリズムを分析しなければならない。なぜならそれ以外の方法によっては，このような過程にある主体にメスを入れることが出来ないからである。

２．彷徨や曖昧さ

この主体の過程に彷徨や曖昧さを導入する前記号的なプロセスはしばしば〈生と死〉や〈性〉の標識で表される。これはかつては人が記号的段階の言語活動に入ると，S.Freudのいう一次過程（圧縮・置き換え）において蘇るにすぎないものであった。なぜなら前記号的な関係の抑圧を通してのみ言語活動は記号的になるからである。だからこの抑圧されたものの再活性化を通してのみ記号化された遠近法を越える揺れを個人は入手出来たのである。だが現代のように過程にある主体が剥き出しになっているときには，主体は単なる記号的存在であることを越えて膨らみはじめるシミュラクルの振動となっている。

この過程化された主体は次の特徴を持つ。①第一次過程であるような欲動的過程が商品化の過程として，つまりファッションやスタイルの政治学，広告文化によって外在化されていること。②この欲動的過程は社会の調和的なルールを破る要素をもつため，〈悪〉と結合するという側面を持つこと。そこで悪意，皮肉，パロディなど社会秩序を破壊もすれば産出もするという側面をもつ方法意識の必要性が痛感されるようになるということ。③この第一次過程は空間の彷徨として，また身体の彷徨として現れること。具体的には中枢神経を諸々のメディアによって外在化したり（様々なメディア・アート），種々の記号によって身体を切り刻んだり加工しようとすること（臓器移植，整形美容，ジョギング）。また都市という「迷宮」を「彷徨」したり，異郷を「旅」することなどを通して直線的遠

近法に亀裂を入れるものとしてあらわれること。芭蕉の「そぞろ神のものにつきて」やカフカの「城」などの迷宮など幾多の作品がこの亀裂を表現するものとして何度も引用される。これらは要するに，遠近法がすっかりシミュレーションと化しているため，過程の中から主体を抽出してくることが極度に困難になっている状態を示している。

3．供 犠

この揺らぎを主体の中に取り入れることは主体過程から直線的遠近法を排除してしまうということを意味しない。ヴァーチュアル・リアリティが成立するためにもリアリティが必要なのだ。むしろ揺らぎは命名し定立する機能を決定的ではないにしても直線的遠近法から取り入れるのである。ただし直線的遠近法が自らの名付け得ない超越性（眼差し）を確保するためには，身体的欲動を生け贄（供犠）とすることで，超越性の〈しるし〉とするということを明かるみに出す（暴露する）という作業が必要である。例えば〈性〉がそれである。この身体性を近代的に機械的に切断する直線的遠近法を斜めから攻撃する（斜に構える）方法意識としてフェミニズムがある。これは単に修辞的に逸脱して見せて，家父長的な権威者の「若い頃」を思い出させて権威に擦り寄る「変則」を攻撃する力を持つ。ジェンダーを問題にすることは決して直線的遠近法の外には出ないような偽の逸脱を拒否することである。それは記号とリズム，意識と欲動との微妙なバランスの上に新しい方法をつくろうとする試みのひとつなのである。

今やリズムを取り戻すための抑圧の軽減は，直線的遠近法を前提とする合理主義的・ヒューマニズム的自己の眼差しの緻密化や更なる合理化によってはなされ得ないことは自明のこととして風俗化されてさえいる。近代的な記号活動の中にズレや自己の Identity の不協和音を見いだすことは日常生活においても脅迫的に我々に襲いかかっているのである。ありとあらゆる家父長的な権威を示す記号が崩壊し軽蔑され，両性具有的な文化が，定型化され女性上位を「安値で」演じて見せるという風俗としてあらわれる。そこで展示されるコンピューター処理された女性像は芝居がかった貧弱な紋切り型そのものである。

4．リズムによる統辞構造の分断と脱意味論化

我々に必要なことは，意味論的なテーマを〈知る〉ことの限界に向かうという意味を持ち続け，人間の「苦悩」を自覚する感覚，つまり喘ぎや叫び，匂いや触覚のリズムに注意を傾けることである。技術的改革によって苦悩から逃れ得るような錯覚を与える近代的遠近法に逆らうような波動とリズムをもたらすこと，自己同一性を構築する操作（したがって判断する意識）に揺らぎをもたらすこと，これが必要なのである。この直線的遠近法の操作から絶えず逸れようとし，それから自立しようとする断片を多様な解釈に対して開き，複数の教示的意味を担えるようにする新たな遠近法を捕まえねばならぬ。人間の可能性か拘束されているという感覚を把握できる新たな遠近法の追求が必要である。それはニーチェがヤーコブ・ブルクハルトに宛てた葉書の次の言葉の追求である。彼はいう，「不愉快なものはといえば……根本のところで歴史上に現れる全ての名前は実は私に他ならない，ということである」と。つまり自らの記号体系に幽閉されているという恐怖，遠近法のシミュ

レーションが生む「実現＝非実現」しかないことの苦悩の遠近法の追求である。

この際には必ずしも統辞上の変則や，判断する意味を構築する述辞的な定立を破壊する必要はない。断絶する斜線が絶えず引かれ切れ目を入れられた各リズムが隔てられていさえすればよい。線条的遠近法が提示する対象が明確な輪郭を失い，不確実さが増す時，直線的遠近法のもたらす押しつけがましい意味づけを弱めるリズムが顕現してくるのである。省略された文，浮遊する連辞は述辞作用の隙間に欲動や「経験の中にパックリと口を開けた深淵」を浮び上がらせる。**自己というものを「成長」や「発達」の面からのみ考察させるという近代的意味の拘束を脱し，自己のどうしようもない不毛さと絶望と肉体の衰えに直面できる意識を再び確保することが必要なのだ。**伝達されるメッセージの意味作用を通して非意味を導入し，多様なリズムを響かせて意味の消失を図ること，これが新たな遠近法の機能なのである。自己の判断する意識を炸裂させて抑圧によって生み出されてリズム化された欲動や深淵の奔流をもたらすことである。このとき我々は苦悩（快楽）を体験する。教育における面白みの欠如は意味という脅迫観念の故に苦悩（快楽）に対して適応不能に陥っているからである。線条的遠近法は感情の渦巻・過剰を技術主義や話術（弁証法）の戯れ言に押し込んでしまった結果と言ってもいいものである。判断する意識を覆し，この意識が抑圧している欲動・不安・恐怖をリズムとして解放する方法（すなわち渦巻）が必要なのである。我々にとっての新たな遠近法とは活動の中に意味という乗り越えることの出来ない構成的な境界を通して欲動や不安を聴き取るような方法である。この欲動や不安は分節されているように見えるが意識的自己には還元されない身体性や歴史の上で分節されているのである。ルールと共謀しながら拡大された意味作用をもたらす新たな遠近法が必要なのである。

第２章　直線的統辞法の排除――操作としての遠近法

１．韻律とアクセント

過剰に水路をつけ意味を生成しようとする操作の特異性は，ズレそのものがこの操作のルールとして自らを表象するというところにある。このとき意味を生成する統一は自らを開かれたものにするのである。直線的操作は意味の生成過程の潜在性しか示さない。ヘーゲルはこの経緯をリズムやアクセントという語を用いて語る。「判断ないし命題一般の本性（この本性は主語と述語の間の差異をそれ自体で含んでいる）は，思弁的命題によって破壊される。命題一般の形式と，この形式を破壊する概念の統一との間の相克は，リズムにおいて韻律とアクセントの間に起こるものに類似している。リズムは韻律とアクセントとの間の揺れと合一から生じる。同様に哲学的命題にあっても主語と述語の同一性は，命題の形式が表現する両者の差異をなくすべきではなく，両者の統一はハーモニーとして現れるべきなのである。命題の形式とは一定の（限定された）意味の表示，すなわち命題の内容を区別するアクセントのことなのである。しかし述語が実態を表現し，主語自体が普遍者に帰するということ――これこそが統一であり，そこではこのアクセントは消えてしまうのである」と。（ヘーゲル「精神現象学」邦訳，岩波書店，上巻ｐ.60）

映像や音響であふれかえっている現代の文化において，価値を問題化し異質化する形式

をさぐるにはこの消失したアクセントを再び浮かび上がらせる必要がある。それには古今東西の諸文化を比較する訓練をし，それによって培われた共感的想像力の地平を社会に示さねばならない。しかしそれが風俗化されたレトロ趣味，異郷探検番組と区別される点は何であろうか。比較のためのカノン（規範）を何に求めるべきであろうか。「科学」や「民主主義」や「功利主義的経験」の言説の中にそれは求められるべきだろうか。だが確実なことはこのような近代的規範による幽閉に対して現代の我々が反乱を始めたということである。このいわば現代人の苦悩に鈍感な技術的理性に対する新たな理性を確保するために，まず我々の「感覚」を掬い上げる方法を模索しているのである。ただ心すべきは，我々の経験があまりにも行き当たりばったりにならざるを得ない現代のような変転期には合理主義は全体主義的統治を押し付けることで自らを維持しようとする傾向を露にするということである。我々としては，戦後の日本の教育が輸入した「概念道具説」的理性を徹底的に追求すれば，それは経験の異質性を排除し，合理主義の檻に閉じ込めてしまう傾向を持ち，しかもそれは全体主義的衝動を潜在させている近代西欧の理性の系譜の上にあることに気づくべきである。永続性と普遍性を求める合理主義的探求を社会的実践的に解決しようとするかぎり，それは我々を鉄の檻に閉じ込めようとする権力となるのである。

2．パロディ（もしくは引用，またはクローズアップ）

ここでパロディを通して表象における支配のあり方を明るみに出すという方法を見てみよう。そのためにはこのパロディという言葉につきまとう18世紀的な機知とか嘲笑というニュアンスから自由である必要がある。つまり確かに18世紀的意味との連続性を含ませながらも，我々が過去から断絶していることをしっかりと認知させることがパロディの機能であることを確認すべきなのである。我々は人々が歴史的な真実を構成しているはずであるとする素朴な諸概念に挑戦することをパロディであると思い込んでいる。しかしこの歴史的真実であるという素朴な諸概念そのものを現代の我々は共有していないのである。個々の経験は拡散されてしまっており，挑戦的な修正や読み直しのための財産が共有されていないのだ。これは単に伝統的な教養が一部の階層の所有物になってしまったことを意味するだけではない。伝統的文化においてすら贋作が本物との対比なしに通用するというより，贋作が本物かを対比させることが意味をなさなくなっているのである。今はこのような世界でパロディを論じなければならないのである。しかしここにあるアイロニーが救いとなる。それは表象の作者やモデルは残らないが表象はそのまま存在し続けるという事実である。だからこそ単純に見える歴史的事実も別な事実によって否定されたり多様な解釈を施され確かなものは何一つないと思われる状況下でもパロディは成立するのである。記録文書が贋作であるとしてもアイロニーは自らに報復することによって断絶を確認する作業たりうるのである。近代的な経験的意志のもとに如何に嘲笑や機知を展開しようとも，そのようなパロディは悲劇的感受性の欠如をあらわしているというパロディを自ずから示しているという意味において断絶的なのである。

しかし近代的で経験主義的実現の世界に生きている我々は，歴史というものに「現実的な」方法で接近できると思いこんでおり，そのため我々がパロディを理解するための歴史的知識は共有できるという習慣の中で考えている。しかし歴史は文書であれドキュメンタ

リー映画であれ，表現に過ぎないことを知るべきである。我々は過去に接近するには表象を手段とする以外に方法はないのである。だからここで確認しておくべきことは，表象の透明性（模倣理論の前提・写実主義の慣習）を無批判に前提することを打ち砕くという機能さえパロディが果たせばいいということである。それは丁度，ジェンダーを特定することが『マン（人間)』という正統的な男性の表象を壊すパロディとして機能し支配の表象戦略を暴露するようなものだ。社会的実践の外側に制度から離れて「素直な，透明な眼差し」を持った自立した科学や芸術があるという思い込みはもはや通用しないのである。意味生産が必然的に「インターテキスト的な」性質をもつことが明らかになるにつれてそのような見解は打ち破られているのである。科学や芸術は社会的実践から距離をもって自立しており，その個々の活動は始めと終結を持つ，というような近代的な前提は，パロディによる表象戦略によって写真表象の透明性や無垢という神話が打破される例などを見ても謂れなきものだということがわかる。事実，写真ほど現実や真実を無垢な眼差しで捉えるという神話に貢献したものはないであるから，写真のからくりを暴くパロディは近代の再現の論理に強烈なパンチを加え得たのである。

アイロニックにコンテクスト化してそれを脱構築するというパロディ的挑戦は教育において特に重要なものとなる。なぜなら，教育の基準を定めるという権威主義的な支配のもつ誇大妄想的な秩序化や体系化に穴を穿つ作用をもつからである。パロディは支配的位置にある者が既にしるしづけられたものであり，しかも破産を宣告されているものであることも示す。教育が如何なる文化を自明のものとして社会に強要してきたのか……これを顕在化させる必要があるのだ。そのためには新たな「教材化」の名においてパロディもしくは引用を行い，今まで日陰に置かれてきたもの，疎外されてきたものを明るみに出すことによってそれを格上げしなければならない。これは今までの支配的歴史記述の自明性を取り壊し，日陰に追いやられてきた者の視点を救済することである。その意味ではパロディは嘲笑すると同時に敬意を表することもあり，韜晦すると同時に自らの意志を強化することでもあるのだ。教材の名において無反省に引用しコピーすることのもつイデオロギー性を暴くには，コピーを切抜き，それをコラージュすることによって支配的教材づくりに挑戦するのである。確かに引用は破壊の対象を権威づけもするのだが，破壊する側面をもつということは間違い。だから支配的文脈を自明視して取り揃えられる教材は猛烈な破壊力を非支配者に及ぼすのだから，これに対してパロディは破壊力を行使せねばならぬ。

パロディとは物語構造と表彰との透明性についての正統的な写実主義的概念（たとえば人物やプロットの動機となる因果律や時空間の直線性など）に対して，それらの断片化を図ったり，異質な形式や情報を導入する技法である。つまり存在と生成の闘争という西欧精神の永遠のテーマの近代的解決法がもはや通用しないことの宣告の方法なのである。なぜなら種々の概念（例えば真・善・美）を身体的事実の中に具体化（刻印）しようとした近代の戦略の無効こそ現代を特徴づけるものであるからだ。たとえばソシュールによる記号の一元性の破壊を見ても，この透明性の神話はもはや維持し難いものとなっていることがよくわかる。「作者の気持ちや考えは如何なるものか」などの問いかけの機構（エコノミー）こそ教育の危機の根底にあるものである。

現代においても，一貫性と連続性を持った自律的存在としての個人というヒューマニズム的人間観が危機に瀕しているという意識は，依然として断片化の中で統合を求める自己

という問題を中心に据えていた。だからこそ，様々な文化活動において見られるように（例えばクローズアップやモンタージュという分析と総合の技法を駆使する写真や映画において見られるように）写実主義的な伝統的主体のパロディが，人格の統合性と全体性を求める近代的探求のパロディにもなり得たのである。そのパロディ化された主体は観客によって作られた主体性（スター）として人々に認識されているのである。

これは現代のパロディの課題を示してくれる。つまり我々はヒューマニズム的・近代的な探求が持つ魅力と説得力を手放すことなく，むしろそれを積極的に利用してメタ的な戯れによりそれらに挑戦しなければならない。換言すれば「制度と歴史の内側から，インサイダー兼アウトサイダーという二重の立場」から，支配的慣習を利用・濫用し，それによって近代的主体の形成過程を浮き彫りにすることである。

もちろん，単に主体の形成過程のみならず，物語性と表彰の形成過程もパロディは問題にする。つまり製作過程を支える諸慣習を利用しつつそれらを剥き出しに対象化して，それらを切り刻むのである。例えば小説の映画化において，「原作者が意図したもの」か否かという問題を支える慣習や，ベートーベンは然るべき奏法で然るべき場所で演奏されるべきだというような慣習をパロディ化するのである。芭蕉が退屈なのではない。学校で扱われる芭蕉が退屈なのである。若者が伝統的な事柄に無関心なのは，出来事そのものが退屈なのではなく，その表彰を支える慣習が退屈であることを暴いているのである。しかし慣習を対象化し，それを暴くということは，その慣習に則り自らを位置付けている自分の対象化でもある。つまり，その慣習のもとであれば観客として傍観できた自分が当事者として責任を負わねばならなくなることの自覚が要請されるのである。自分か観客としてフィクションを見ているのか，それともその出来事の参加者として責任を持たされているのかそのいずれかを決める境界が曖昧化され，その境界性自身が問題化されていることを意識するようなパロディが現代のパロディであることの自覚なのである。

つまり観客の期待，父母の要求といった地平にある慣習（分類の仕方，表象，スタイル）を意識化すること，それらが徐々に不安定になり，解体するように多層的なパロディを仕掛けることが必要である。それらを別の文脈に置くことによってコード変換し，パロディ化された特定のテキストをつくること。これがオリジナルな主体（始源としての主体）という慣習を暴き，その主体の深刻な危機や犠牲（的精神）や危機の乗り越え（解決）といった（近代的問題解決的……例えば目的意識を持とうとか手段を選ぼうなどという教訓の）物語や筋書きを滑稽なものに変換するのである。このように多層的なパロディによって慣習を剥き出しにし，その慣習に挑戦することによって，我々が無意識のうちにどっぷり浸かっている支配的表象を暴き出すのである。こうして我々は制度化された境界を意識する。学校的文化とマスコミ文化やビジネス文化との境界を問題にすることによって諸々の境界をあまりにも分離し過ぎたり，融合させすぎる事態を批判するのである。こうして教育を受ける権利という社会的選別と関連する文化上の境界づけの既存のあり方に釈明を求めることができ，生涯学習なる幽閉をパロディ化することが出来るのである。

近代的個人の形成を肖像画や自伝の成立過程とパラレルに見れば事態は一層良く理解できる。近代的個人を越える主体の形成過程は，自伝を書くことや肖像を描くことに似た生涯学習の枠組みを壊していくプロセスである。それは他者の言説や表象に従属（subject）させられることを拒否する主体（subject）を描こうとすることが主体を不在にすること

を示す過程である。なぜなら，どんなに「事実に迫る」自伝を書こうとしても，ドキュメンタリーとかノンフィクションをつくること自体が虚構化された生活や生涯を描くことになるからである。そこで用いられる諸資料（写真や文書）はたとえそれが本物であっても暗示を与えるだけであり，滑稽であるか真面目なものであるかは観客の責任のおいて判断されるべきものとなる。つまり語られている主体についてはほとんど何も伝えてはくれないのである。せいぜい矛盾に満ちた主体が現れるだけである。つまり全体的・統合的個人を表象しようとするヒューマニズム的理想というものは単なるフィクションである。主体の写真を好きなように編集できる立場の者も，対象となっている主体を捉えることは出来ない。ましてそれを眺めるだけの観客は主体を謎としてしか見ることは出来ない。

ところで謎とシンボルは古代ギリシャ語では同じ意味をもつという。謎すなわちシンボルの提示としてのパロディが明らかにするのは，我々が主体を構築したり歴史を認識する場合，結局「表象」を通じてそれを行っているにすぎず，したがってイデオロギーを構築しているのだということである。パロディはリアルなものとフィクティヴなものとの境界や本物と偽物との差異を曖昧にすることである。これは個人の「成長・発達」というフィクションを暴くことを通じて，歴史の進化や教育の可能性をパロディ化するものである。内側から支配的慣習を確認すると同時にそれを破壊するという二重のコード化作業を通じて類似する教材（スクリプト）を使用する戦略（作業手順の再考）としてパロディはある。

参考文献

（1）Arthur Kroker／David Cook，The PostModern Scene，1989，大熊昭信訳，法政大学出版局，1993
（2）Julia　Kristeva，Polylogue，1977，足立，西川他訳，白水社，1986
（3）佐藤忠良，中村雄二郎他，遠近法の精神史，平凡社，1992